

大 寨

——中国における農村建設の典型——

河 野 通 博

【要約】 山西省の太行山脈中の一山村である大寨生産大隊は中国における社会主義的農村建設の典型とされて、一九六四年以來、「工業は大寨に学び、農業は大寨に学ぶ」運動が全国的に展開されて来た。しかも文化大革命の大風大浪の中において、大寨の声価はますます高まり、大寨の作風に学ぶ運動は今や全国的に高揚を迎えている。それでは大寨はどのような点で典型と見なされているのだろうか。

従来の大寨の紹介は一窮二白の状態にあり、山も谷も荒れはてていた山村が、あらゆる困難を克服して、自然改造をなしとげ、安定多収穫の耕地（總産高産田）を作り出した点に主眼がおかれていた。大寨は同時に農業生産技術の面でも、自力で、先進的な高水準の生産技術を開発した点で模範的である。だが、大寨が学ばねばならない点は高い生産力水準をかちとったことに限られるべきではなく、むしろこのような生産力上昇の起動力をどこに求めたかが重要なのである。

大寨ではその起動力を團結した貧農・下層中農の積極性に求めた。個々の力をとって見れば半人前にも満たない老人や子供たちが、集團の威力を発揮して、中農上層を上廻る生産をあげたことがその出発点であった。大寨の幹部たちはこの教訓にもとずき、常に貧下中農と團結して、共に学び、共に労働し、共に生活して、自力更生の難事業に挑み、失敗を教訓に生かして、一步一步成功をかちとった。「鬭争、失敗、再鬭争、再失敗、再鬭争、直至勝利」を地で行った現代の愚公たちは、その鬭争の中で、社会主義建設と云うものが、常に四日との戦いであり、それを維持、復活させようとする、地主、富農、反革命分子、悪質分子との激しい鬭争の場であることを身を以て体験し、毛沢東思想の活学活用により、その本質を看破し、それを打破することに努めた。このように階級鬭争、生産鬭争、科学実験と云う三大革命運動の担い手として、大寨は社会主義農村建設の典型とされたのであるが、「走資派」の数次に亘る攻撃に反撃を加えつつ、勤儉弁國、勤儉弁社の精神を守り、「謙虚で、慎重で、おごりをいましめ、あせりをいましめ、誠心誠意人民に奉仕し」、「個人の利益や小集團の利益から出発しない」、大寨は今日なお典型たりえて、社会主義中国を大衆的基盤の上に樹立する原点となっている点でも大寨は今日なお典型たりえて、社会主義農村建設の典型とされて、一九六四年以來、文化大革命の大風大浪の中において、大寨の

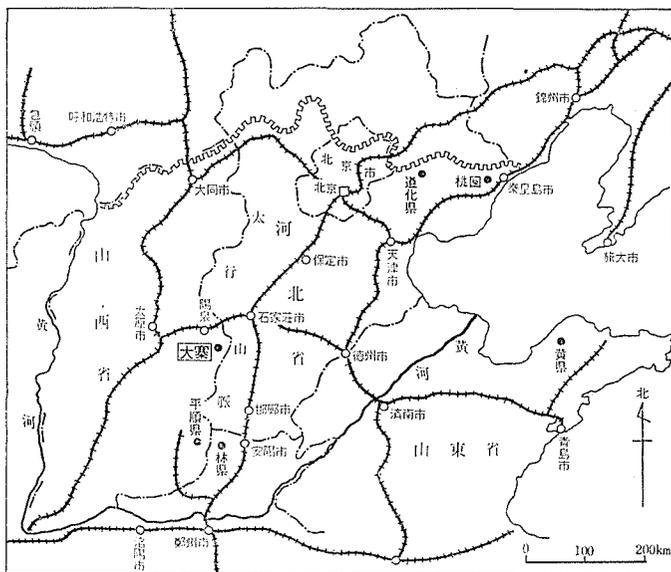
史林 五一卷六号 一九六八年一月

一、はじめに

山西省昔陽県の山村である大寨の名が中国全土に知られたのは一九六三年の初夏からのことであった。同年六月二日の人民日報は「幹部参加労働的偉大革命意義」と言う記事の中で、大寨党支部書記の陳永貴の活動をその典型として紹介した。次いで一九六四年二月一〇日、人民日報は再び、「学習大寨」と言う記事をかかげ、全国の農村に向い、革命精神にみちみちた大寨建設の経験に学ぶことを呼びかけた。一九六五年一月一日からは北京の全国農業展覽館で、大寨式農業典型五二單位（人民公社八、生産大隊二一、生産隊一、互助組一、区二、県二三、專區四、市二）からなり、全国の省、市、自治区にわたる）の成果が展示された。

この段階で一度私は大寨についてのメモをまとめてみたことがあるのだが、その当時私のえがいた大寨像は、幾度も失敗にも屈せず、失敗から教訓を汲みとりながら自然改造事業に目ざましい成果をあげたことと、「向科学進軍」の号召に忠実に従って、農民自身の創意に依拠しながら、科学的な農業技術体系を生み出したこと、ならびにこの二

つが相まって、かつては人も貧しく、自然もまた豊かではなかった山村が、華北全域でも特にすぐれた先進的高位生産力農村に生れ変わったことを示すのに止まっていた。幹部が率先して最も困難な作業、最も問題の多い場所に取り組み、貧農、下層中農（以下貧下中農と略称する）に依拠しつつ建設を進めたことについても、文中で強調はしたが、それらの一切が中国における二つの路線のたたかいとどのようにかかわり、大寨がなぜ「典型」たりえたのかについては極めて掘り下げが足りなかった。この点についてはもとより私の理解の浅さが大きな原因であるが、一九六五年以来、ことに文化大革命の進行に伴って、その具体的情況が次第に明らかにされて来た。先に述べた大寨式農業典型の展示そのものが、姚文元の「新編歴史劇『海瑞罷官』を評す」が『文匯報』に発表される一〇日前にはじまったのだが、一二月一日の『人民日報』は「全国学大寨、大寨怎麼奔？」と言う見出しで、大寨が自分のあげた業績にはこるることなく、謙虚に全国のすぐれた実践に学ぶ決意をもっていることを報じ、翌一九六六年三月二日には、大寨は毛沢東思想を生活活用することによって、社員らの思想水準を高め、合理的な



労働管理方式を確立できたのだと言う陳永貴の談話をのせた。やがて一九六七年初頭、上海に続き、山西省で奪権闘争が進展する過程で、大寨が明確に革命造反派の側に立っていることが報じられ、三月十八日山西省革命委員会の成立にあたり、陳永貴は同委員会の副主任委員に選出された。そして『人民日報』の四月五日号と八月六日号と二回にわたって、陳永貴は大寨の社会主義建設が中国のフルシチョフを先頭とする当権派との激しい闘いの中で一步一步実現されていったものであったと、具体的事実をあげてはじめて説明し、一九六八年八月二十六日の『人民日報』は人民公社発足一〇周年を記念して、「狼破階級闘争、在社会主義道路上闊歩前進！」と云う題で、毛沢東主席が自らうちたてた一本の赤旗であるとされる大寨生産大隊が毛沢東思想を武器として、革命闘争を堅持した過程を総括している。一方では一九六七年九月六日の同紙は「仮四清、真復辟」と題して河北省撫寧県盧王庄人民公社桃園生産大隊で劉小奇夫人の王光美が率いる工作組の行った行動に関する調査報告をのせると共に「掲開一箇復辟資本主義的大陰謀」と言う解放軍報社論をのせたが、一九六八年夏には桃園大隊のその後

の翻天覆地的變化が報じられ、また桃園大隊の農民たちが小説「風雷」の批判を通じて、その受難の歴史を語っている。^⑧

これら文化大革命の大風大浪の中で報道されるに至った諸点を含めながら、大案を再検討することにより、「農業は大案に学」べと言うスローガンがなぜ出されたかを明らかにすることができると思うし、またそれを通じて、中国において現在指向されている社会主義農村の建設の方向を把握することも可能であろう。それと共に人民公社ないし、その生産大隊が農業生産上の一採算単位と云うだけでなく、社会主義建設の基礎単位としてのような重要な意味をもつと考えられているのか、つまり毛沢東路線推進の立場からこの基礎地域に「プロレタリアート独裁」を確立するところがいかに重視されているかもまた明らかとなるであろうと考えるものである。

- ① 河野通博「大案おぼえがき——中國の自然改造の事例(一)——」『水利科学』五二号。一九六六年二月。この時の記述の素材としては主として「農業戦線上一面紅旗『大案』」(北京人民広播電台農村組編写、一九六四年八月刊)によったが、今回はその改訂増補版である『大案紅旗飄』(農業出版社編、一九六五年一〇月刊)を底本とした。

② 科学実験は階級闘争、生産闘争とともに三大革命運動とよばれ、一九六二年九月の中共第八期一〇中総会のよびかけにこたえ、一九六三年から展開されたが、大案では後述のように早くから行なわれている。

③ 「突出政治的生動一課」、『人民日報』一九六六年三月二日。

④ 「陳永貴響應毛主席号召站在開爭前列、為全省全國勞働模範樹立了光輝榜樣」、『人民日報』一九六七年三月五日。

⑤ 陳永貴「大案在毛沢東思想的光輝照耀下前進」、『人民日報』一九六七年四月五日。『紅旗』一九六七年第五号にものせられている。

⑥ 陳永貴「大案是在同中國赫魯曉夫的開爭中前進的」、『人民日報』一九五七年八月六日(『北京周報』一九六七年四九号に要約した日語訳がある)。

⑦ 「緊跟毛主席偉大戰略部署、同中國赫魯曉夫進行堅決開爭、桃園大隊發生了天翻地覆的變化」、『人民日報』一九六八年八月一〇日。

⑧ 「從桃園看反動小説『風雷』」、『剝去祝永康的偽裝』、『人民日報』一九六八年七月一七日。

二、大案における農業集團化の歩み^①

(一) 旧大案の姿

大案は太行山脈の中部にあたる、虎頭山から分派する八本の尾根筋にはさまれた七本のせまい谷と、これらの谷の集まった所にある緩傾斜地からなる、小さな山村である。

もとは、頭上には黒ずんだ山がのしかかるようにそびえ、

尾根筋は禿山で表土も薄く、山腹は水利の悪い斜面畑ばかりであったし、黄土地帯特有の深い谷間には石塊が散乱し、荊や野草の生い茂る中にやせた畑があった。緩傾斜地にある一部の耕地のほか、大部分がこれら山頂、山腹、谷底に散在する、総計しても八〇〇畝^②(約五三ヘクタール)にも満たぬ耕地は四七〇〇枚余りに細分されていて、どの畑も土は硬くて薄い、やせた土地で、風が吹くと乾き切ってしまい、谷にもふだんは流水がなく、三日も雨がないと斜面畑の苗は黄ばんでしまうが、準乾燥地域の常として、一たび雨が降ると集中豪雨になりやすく、山腹やけわしい谷壁を滝のように流下する雨水により、作物も土も押し流されてしまうため、雨が降っても、降らなくても災害が生じ、その上風害や雹害なども加わって、十年九不収と云う状態が続いていた。しかも地力が低いので、豊作の年でも一畝当りの平均収量は七〇キロ以下、ある富農の持つ最上の畑でさえ一五〇キロに達しなかった。

当時大寨の土地の六、七割は村の内外の地主の手中にあり、全村約六〇戸の階級構成は、地主一、富農三、富裕中農一二を除くと、他はすべて貧農か下層中農であった。そ

のうち三〇戸以上が地主、富農に年雇、日雇として使役され、子供たちも牛や羊の放牧をさせられていたし、さらにそのうち二一戸は全くの素寒貧で他地に乞食に出たこともあった。また六戸もの家が地主に小作料を取り立てられて、食べるものもなくなったため凍死、餓死して、一家死に絶えている。現在の党支部書記の陳永貴自身貧農出身で、大寨から四里ばかりはなれた石山で生れたが、生後間もなく、父は故郷をはなれて、日雇稼ぎの身となり、わずかばかりの家財道具と籃に入れた永貴とを天秤棒でかついで、大寨にやって来たのであった。一九二〇年、永貴が七歳の年大災害があり、生活に窮した父は母と娘と永貴の弟を人に売ったが、それでも借財の返済を迫られ、首をくくった。孤児になった永貴は八歳の時から牛飼、羊飼いをやらされ、一一歳からは二〇年以上もの間日雇稼ぎをやって大きくなったが、当時黒大豆一斗のほかはふすまとあわぬかで一年を食いつないだ。一般の村民の常食もぬかと野草の日が多かった。家畜も地主と富農の所有で、全村を合せても牛が七頭、ロバ八頭、豚一頭、羊百頭にすぎなかった。

その上抗日戦争当時遊撃区に属していた大寨は日本軍の

三光政策の犠牲となり、ことに一九四〇年日本軍は青壮年約四〇人を強制的に連行して使役したあと、ある者は殺され、ある者は生き埋めにされてしまった。このような苦しい日々、上層農家の中には日本軍の手先となったものも出たが、貧下中農を中心とする大部分の村人は抗戦を堅持したのであった。

(二) 解放後の歩み

一九四五年、日本は降伏し、昔陽県は共産軍の手で解放された。この年土地改革が実施され、地主、富農の支配はうち倒された。その結果村民の暮しもある程度改善されたが、一戸平均一三畝（八反六畝余）、反収七斗弱のやせ地しかないこの村では、個別経営によって「一窮百白」の状態から抜け出すことは、特に貧下中農には「天に上る」よりも難かしいことであった。そこで党の「農業を集団化しよう」と言う呼びかけに応じて、幾組も互助組が生れたが、実はこの集団化への第一歩が大寨のその後に重大な意味をもつたのである。当時大寨の富裕中農一戸は彼らだけで好漢組と呼ぶ互助組を作った。人手も農具もそろっている彼等は装備不十分な貧農と組むのはいやだし、かと言って互助

組を作らねば反動分子に見られるので、名目上は集団化したのだが、実質は個別経営を維持しようとするものであった。中農以下の互助組結成も進んだが、最後に互助組に入れてもらえぬ農家が九戸残った。四戸は老人だけ、五戸は子供だけの農家であった。これを見た陳永貴は「党が互助組を組織し、生産を発展させよと呼びかけたのは、われわれ解放された貧しいものが一致団結して共同で富裕化する道を歩むためである。あの老人たちはすべて昔は日雇や牛馬の放牧の番で辛酸をなめてきた仲間だし、子供たちは敵に親兄弟を殺されたため、頼るべき大人がないのだから、この人たちを見すててはならない。好漢となるなら、新社会の好漢になろう」と、もと所属していた互助組を脱退して、九戸の貧農と「老漢娃娃組」（老少組）を結成した。

老少組の結成は村の話題となったが、誰も好漢組に太刀うちできるとは思わなかった。しかし老少組は集団化の道を堅持し、早朝から暗くなるまで、風雪を冒して働き、正月も休まずに肥料を運んだ。老少組と好漢組との競争は集団経営と個別経営との闘いであったが、その結果は一九四七年秋の収穫時に誰の目にも明らかとなった。人手

も装備も弱体な老少組が一畝当り、好漢組を三〇斤も上廻る一五〇斤の収穫をあげたからである。一九四九年には好漢組も畝産一三二斤に上昇したが、老少組は更に三七斤も引き離して一六九斤の収量を示した。大寨の大衆は組織の力量をはっきりと見てとり、その冬には全村六七戸のうち四九戸が老少組に加入した。この成果を基礎に、一九五一年には貧下中農の間で合作社結成の要求が高まった。

しかし中共党内には毛沢東の推進する集団化への道に反対する人々もあった。一九五〇年劉少奇は安子文への指示⑤の中で有名な搾取有功論を述べると共に、富農經濟を鼓吹し、数年後に全農家の八割を馬三匹、犁一つ、車一台をもつ農家に發展させるべきだと主張し、また人を雇って畑を耕やさせることは貧乏人のためにもなる合法的なことであり、制限を加えるべきでないと言ったという。このことが事実とすれば、これはまさに好漢組の目ざす富農的經營を是認するものであり、人が人を搾取するブルジョアの農業の發展を容認する路線であった。一九五一年には山西省など各地の広汎な貧下中農から、老解放区での先例にもとずき、互助組を一步高めて、農業合作社を試験的に作ると

言う要求が出された。大寨もその一つだったと考えられる。これに対して劉少奇は互助組を合作社に高めることによつて、土地改革後自然発生的に生れて来ていた農民層分解の傾向に打ち勝とうとするのは、「一種の誤った、危険な、空想的な農業社会主義の思想である」ときめつけたと言われる⑥。山西省では当権派によつてこの指示が忠実に守られ、大寨の要求は却下された⑦。このことは後に初級合作社約二〇万が解散させられたことと共に、集団化に強い反対の立場をとる有力幹部のあったことを示している。

しかし一九五一年一月党中央から「農業生産の互助協同についての決議」が草案の形で示されたことに力をえたのであろう、一九五二年春、再び大寨の貧下中農の意志により、陳永貴は十数回も昔陽県当局に初級農業生産合作社の結成を認めることを要求したが、県の責任者は上級の怒にふれることを恐れて、どうしても許可しなかった。一九五三年二月農業生産の互助協同化に関する決議が中央で正式に採択公布されてはじめて、その春に大寨に対して三〇戸程度の小型合作社なら作ってもよいと云う許可が出された。大寨ではすでに四九戸の大互助組ができていたし、大

寮党支部はこの決定は誤っていると主張したが、結局表面は三〇戸と申告して、^① 実際は四九戸の初級合作社を作り、半社会主義的協同化の段階に進んだ。一畝当りの収量は一九四九年の一六九斤(老少組)から一九五三年には二四〇斤に上昇した。これは好漢組の収量を六〇斤上廻り、また合作社に加入しているある富裕中農に配分された糧食の量は、条件の違わない、単独経営の富裕中農を二千斤も上廻ったので、今まで白眼視していた富裕中農のうちから加入を申し込むものも現われた。もちろん彼等の二面性が簡単に捨て切れたわけでもなく、また地主・富農・反動派、悪質分子、右派分子などの反動分子(地、富、反、壞、右と略称される)が策動をやめたわけでもなく、地力を誇大に報告して、土地に対する配当を多くしようとする中農や、合作社の成果にケチをつける元日本軍スパイもあつたが、大衆的批判の前にその策動はうちやぶられ、集団農業の優位性が実証された五三年冬には、好漢組を含めて大寮の全戸が一合作社を構成することになった。

それにしても半社会主義段階ではまだ土地・家畜・家具の個別私有を認めているため、集団経営との間に矛盾が存

在することになり、貧下中農の側からは「土地持ちには坐つたままでも食糧が手に入る」状態に対する批判がはげしく出され、生産の発展にも影響を生じた。かくて一九五五年の農業協同化についての毛主席の呼びかけにこたえ、大寮は農業協同化の第三段階である社会主義的性質の高級農業生産合作社を結成した。これによって社員労働意欲は増し、一畝当り収量は三四〇斤をこえた。一九五八年全国に人民公社化の高まりが訪れた時、大寮でも、合作社規模では自然改造推進に限界があることを感じて、大寮人民公社を結成し、二三の生産大隊の一つとなった。

① 本章の主要参考文献

A 『農業戦線上の一面紅旗「大寮」』五——二〇頁。

B 『大寮紅旗飄』一一三頁。

C 陳永貴「大寮人の革命志気」、『水利与電力』、一九六四年第四期、(一九六四年版『人民手冊』所収)。

D 「中國農村兩条道路の闘争」、『紅旗』一九六七年第一六号、(人民日報)一月二三日、(日本語訳、中國農村における二つの道の闘争、『北京周報』一九六七年第四九号)。

本文中特に註記しない具体的事実は、AとBによつたものである。

② 一畝(ムー)は日本の六・六七アールにあたる。文中の畝はすべて「ムー」を意味する。なお一斤は五〇〇グラムにあたる。

③ 陳永貴の幼少時代については、Cの本人の記述による。

④ 資料C

⑤ 資料D

⑥ 「現在、搾取は人を救うものであり、搾取を許さないのは教条主義である。いまは、搾取しなければならず、搾取を歓迎しなければならぬ。」(資料Dによる)

⑦ 資料Dによる。

⑧ 同右。

⑨ 陳永貴「大寨是在同中国赫魯曉夫的闘争中前進的。

⑩ 同右。

⑪ 同右。

三、自然改造の歩み^①

八百畝にも足りない大寨の耕地の九割までは山の尾根筋や山腹にあり、しかも周囲にしっかりとした畦もない斜面畑だったから、水土流失も激しく、地力も低かった。このままでは雨にも早にも弱く、合理的密植も実施できない状況で、生産基盤整備が先決問題であることは明らかであった。だが大寨においても、零細土地所有、零細経営のままでは基盤整備には手がつけられなかった。互助組段階でも生産力上昇は専ら労働集約化(精耕細作)に求められ、それはそれで一定の成果を収めた。しかし、やがてそれは限界に達

するであろうことも明白であった。一九五三年、前書記賈進財の推薦で、大寨党支部書記の重任を引き継いだ陳永貴はこの土地で生産を阻害している大敵は一つは秋の洪水であり、一つは春の旱魃であること、つまりいずれにせよ水のコントロールの問題であることを多年の経験から認識していた。特に水土流失の激しい、準乾燥地帯の集中豪雨を農業生産力として利用するためには、地表を無駄に流れる雨水を土の中に蓄えるほかはない。ここから「海綿田^②」の構想が生れて来たのである。つまり大寨の耕地土壌を一尺前後の厚さの、有機質を大量に含んだ海綿状の土壌に改造して、それに年雨量五〇〇——七〇〇ミリの全雨水を吸収させようと言うのである。

だが海綿田を現実のものとするためには、尾根筋の畑には畦を廻らして水土の流失を防ぎ、山腹の斜面畑は水平な段畑(梯田)にし、谷底には堰堤を設けて、土を貯溜し、低湿地には冠水を防ぐ措置を講じるなど自然の大改造を必要とする。こんなことは零細地片の私的所有と個別経営をそのままにして、個人の努力で実現しようとしても無理である。大寨でも解放前に兄弟二人して山腹を開き、七畝の

段畑を作った先例があるが、開墾後の種子代などに困って、地主から金と食糧を借りたため、彼らの血と汗の結晶はそっくり地主にとりあげられてしまった^③。自然改造にはやはり人々が集団の威力を発揮し、自力更生の意気込みで、自主的にとりくまねばならない。そのような情勢を生み出す基盤として、一九五三年初級合作社の成立が見られた。所有権はなお個々の農民に残されていたが、経営権は集団の手にある。そして集団経営の成果はすでに富裕中農さえも認めざるをえない状態であった。

同年党支部は正式に自然改造を基礎とする生産発展計画を提出し大衆討議にかけた。当然さまざまな意見が出された。山が高く、谷も深いことにたじろぐ者もあったが、陳永貴は「山が大きく、谷が深ければ、それなりによい点がある。山腹は多くの段々畑にできるし、深い谷には堰堤を築けば、泥をしかりためる「刮金板」になる。長い川がなくても、洪水を蓄えれば、耕作に役立つではないか^④」と説いた。解放前の兄弟の開墾の話も出たが、多くの者は「旧社会でも彼等は土地を開いた。今は地主も打倒され、合作社もできた。六十戸が力を合せたら、どうして治山が

できないことがあるう^⑤」と言い、又、一体何年で完成するつもりかと言う間に陳永貴は「もっと山が大きく、谷が多くて、一つ治めれば、それだけ改造を要する山や谷の数は少くなるのだ。三年でだめなら五年、五年でだめなら十年、我々の代でだめなら子や孫たちが引受けてくれる^⑥」と力強く答えた。まさに愚公移山を地でゆく話だが、討議を繰返す過程で、黨員、幹部はもとより、大衆の思想が統一され、この大事業をやりとげようと言う意欲が湧いて来た。そこで党支部と合作社委員会は「自力更生、治山治水、旧地を新地に改造する一〇カ年計画」を制定し、五年冬全村をあげての自然改造の戦いが始まった。

第一年度は試験的に白駝溝(長さ七五〇米、幅三〇米)の改造からとりかかり、ここに七本の石積堰堤を築いた。陳永貴は堰堤の石積み係となり、前書記で、陳永貴の手柄を見込んで、その地位をゆずり、副書記となっていた賈進財は石の切出し係を担当し、他の幹部も率先して谷に入った。社員も七一歳の老人まで幹部の止めるのを振り切って参加し、総数五十名が夜明けから薄暮まで働いたので、一カ月の工事量を一八日で完成し、白駝溝(合作社と改名)は、

七つの堰堤で仕切られ、土を厚く入れた畑に生れ変わった。

大寨の人々は集団の威力を眼のあたりに見て奮い立ち、一九五四年冬から五五年春にかけて、一挙に四つの谷を改造した。だが次の狼窩掌溝では大寨人は大試練を受けることになった。この谷はその名のごとく、集中豪雨の際激しい山津波の起りやすい谷で、一九五五年冬、三八カ所の堰堤をきづき、数万立方メートルの土を運んで梯田化したのに、五六年夏の大雨で堰堤はことごとく押し流された。その冬、堰堤の基礎を深くし、より大きな切石を積み上げ、洪水の衝撃力を弱めるため上流に小型ダムを作ったが、又もや五七年夏には更にはげしい豪雨にあつて、三二カ所の堰堤が崩壊してしまつた。

二度にわたる失敗は、元来二面的で、個別経営に未練を残している富裕中農を動揺させ、富農も時機到来とばかり「人は水と闘わず、猫は犬と喧嘩しない。人間が龍王様に勝てるものか」^⑧などと攻撃をはじめた。これは一場の激しい思想闘争であつたが、賈進財は「必らず改造をなしとげねばならないし、我々はやればできるのだ」と強く言い切つた。責任者として最も苦境に立たされた陳永貴も、旧社

会でなめて来た苦難の数々と階級敵の悍猛な笑を思い浮べ、絶対に退却してはならないと決意を固めた。貧下中農たちも「転ぶのを恐れては山に登れない。狼窩掌から退却して敵を喜ばせてなるものか」と、前人未踏の道を切り開く意気込みを示した^⑨。彼等は狼窩掌に出かけて、詳細に欠点を調べ、堰堤の強度を増すため、窖洞の戸口の構造にならつて、ドーム状の堰堤を建設することなど新工法を研究し、全村七〇余人が三たび狼窩掌に挑んだ。大雪の中を賈進財は相変らず薄明から石切場に出かけ、薄氷の張つた弁当をかじりながら石を切出し、若夫婦五組、一家総出動七軒と云う村をあげての奮闘の結果、ついに一九六三年の百年来と言われる大水害にも耐えた頑強な堰堤が完成し、狼窩掌は征服された。

こうして次々と谷を改造して、総延長七・五キロに上る一八〇本あまりの堰堤が完成し、山津波による水土流失を防止すると共に、尾根筋の畑には高さ一尺の畦をめぐらし、山腹の斜面畑三〇〇畝を水平段畑化する作業が続けられた。もと四七〇〇枚に細分されていた畑は二九〇〇枚ほどに統合され、ダムが二つ、山を掘り割つた用水路が二

本と三〇〇〇余の魚鱗坑^①や蓄水池が造られ、谷間には八〇畝ほどの新しい畑が開かれ、果樹園の造成や植林も開始された。そして、人民公社の結成された一九五八年には一畝当り収量は五三四斤、一九六二年には七七四斤に高まった。

大寨人は天秤棒ともつこと鋤と石を切るのみと玄能と言う貧しい装備しかなかったにも拘らず、両手を使って自然に挑み、次々と改造をなしとげたが、試練は決して終わったわけではなかった。一九六三年八月二日から八日にかけての百年来の大集中豪雨の結果、狼窩掌溝以外の谷では、一年かかって築き上げた堰堤百余本のうち数十本が押し流され、耕地全体の二二%が破壊された。道路も寸断され、一四五の密洞のうち一一三が崩れた。

この未曾有の大災害にまた弱音をはいたのは富裕中農と中農であった。ある富裕中農は「これは工法のまちがいがいから生じたものだ。二、三年で復旧することは無理だから副業に精を出そう」と言い、ある中農は「土も苗も石垣までも流された土地の復旧は後まわしにして、洪水に押し流されなかった土地だけ応急修理をしよう」と主張した。党支部はこれらの考え方を分析した結果、「このような考え方は社員の中に普遍的に存在しているが、それは眼前の困難だけを見て長期的展望を欠き、局部だけを見て全体を見ず、個人の利益だけを眼中において、国家のことを顧りみない、困難に挫けた敗北主義的な考え方である。これを解決しておかないと復旧工事にも影響する」として、まず貧下中農を集めて、討論をくりかえした。その過程で土地の復旧は社員的生活にかかわるだけでなく、更に重要なのは食糧を生産して国を支援すると言う任務にかかわる問題であること、また目前には大きな困難があるが、がんばれば克服できると明らかにした。貧下中農の会に引き続いて、社員大会で討論し、全体の意見が一致して、災害復旧に挑むことになった時、陳永貴は次のように総括した。「敢然と全面的に土地を恢復するかしないかは敢然と革命をやるかしないかの問題である。毛主席は精神は物質に変わることができると言われた。党と全国人民の我々に対する慰問は我々に対する最大の支援である。物質的支援は使い果される時があるが、精神的支援は使い果されるものではない。我々は必らず、自力更生、革命精神を物質的力量に変えて、洪水におし流された土地を取りもどさねばならない」と。

一九六三年秋の応急措置ののち、翌六四年一月后底溝の改修工事から本格的復旧が始まった。賈進財は再び毎日未明から夕闇に閉されるまで「のみ」を振いつづけたが、一人の若者が自発的に道具を買い込んで、賈進財を師として

石を切りはじめた。六四年一年間に彼等は二万個の石を切り出した。生産大隊長賈承讓は骨を刺すように冷たい真冬の泥水にとびこみ、押し流された切石を堀り出した。后底溝の工事を一七日間で完成した後、彼等は勝に乗って、老墳溝に一枚一二畝半（約八三アール）と云う大きな畑を二〇日間で作り上げ、厚さ四尺に達する土を入れた。三月になると人民解放軍の支援部隊が到着し、大寨人と協力して、七日間で合作溝を復旧した。一九六五年春までには家屋の新築も耕地の復旧もほぼ完了したが、その前に、一九六四年秋には一畝当り八〇〇斤以上と云う揚子江地域なみの空前の収量をあげ、さらに六四年冬には復旧工事と併行して、より多くの収穫をかちとるため、四たび狼窩掌に挑んだ。今度の改造では今までの経験者のほかに青年男女、特に二〇歳から一四歳までの二三人の娘たちの組織する鉄姑娘隊の活躍が目ざましかった。大寨では自然との闘いの中で革

命の接班人がたくましく鍛え上げられていったのである。

しかも彼らは後継者養成の教材としてかつての窮大寨の姿を留める小さな谷を一つ旧状のまま残している。

さて、ここに問題になるのは大寨の目ざましい自然改造を大寨の生産力上昇との直接的関連と云う視点からだけ評価するのでよいのか、或はもっと広い地域との関連からはどう位置づけるべきなのかと云う問題である。中国の水利建設事業全般については、前に述べたことがあるので、^⑤ 詳述を避けるが、解放当初、土地改革が進み、互助組が結成されてゆく過程で、政府は応急的治水を主とした水利建設を国营工事の形で行なった。第一次五カ年計画の期間中も多目的ダムや大型用水路の建設に重点をおく国营の淮河治水工事が実施された。ところが一九五五年に発表された黄河の治水・利水計画^④では三门峡などの大型国营工事と同時並行的に黄土高原地帯の地域住民による水土保持のための自然改造事業が進められると云う「二本足で歩く」方針がうち出されている。これはやはり農業集団化の進展と相呼応していると見てよいであろう。そして一九五七年には河南省禹県^⑤などで、人民の手による、県クラスの規模での水利

建設が、下からの力で盛り上っている。これを基礎として一九五八年には水利建設の三主方針^⑩つまり、社弁（公社経営）を主とし、蓄水（貯水、利水と言ってもよい）を主とし、小型（の建設）を主とする自然改造政策がうち出され、大型で、治水を含めた、国营工事はこれを支援する（三輔）存在になった。社弁と云っても、これは必ずしも人民公社規模以下の単位ではやってはならないと言うのではなく、むしろ基層単位の自力建設を重視しながら、その手にあまるものは公社の自主建設にまかせたと見るべきであろう。大寨の自力改造は基層単位の自力建設の典型と見るべきだろうし、大寨が行なった施工技术はほとんど黄河治水水利計画の中で水土保持のため行なうべき措置とされたものと一致している。この三主方針も中国の、人民を思い切った立ち上らせ、自主的に下から革命を行なわせる方針に沿ったものであって、ソ連方式に学んだ第一次五カ年計画当時の大型国营工事主体方式とは全く違っている。

それでは自然改造をすべて人民公社におしつけたのかと言うと、もちろんそうではなくて、広い地域にわたる大型建設事業は国营で実施している。新安江ダムや最近の海河

治水はその一例である。しかし、自然改造の基軸はやはり地域住民が自力で生産基盤を整備しようと云う下からの自主的、積極的な不屈の行動におかれるべきであるところから、大寨はまずこの面で全国的模範とされたと考えらるべきであろう。

① 本章の主要参考文献。

- A 『農業戦線上の一面紅旗「大寨」』二二—三三頁。
- B 『大寨紅旗飄』一四—二八頁。
- C 莎蔭、范銀懷「大寨之路」、『人民日報』一九六四年二月一日。
- D 陳永貴『大寨人的革命志氣』。
- E 「学習大寨、用革命精神建設山区的好榜樣」、『人民日報社論』一九六四年二月一〇日。特に註記しない具体的事実はAとBによったものである。

- ② 人民中国や映画「大寨田」ではこう表現しているが、大寨で実際に海綿田と呼んでいるかまだ不明である。
- ③ 資料Cによる。
- ④ 同右。
- ⑤ 同右。
- ⑥ 同右。
- ⑦ 后底溝、赶牛道溝、念草溝、小北峪溝。
- ⑧ 資料Cによる。
- ⑨ 同右。
- ⑩ 映画「大寨田」による。
- ⑪ 直径二メートルほどの穴で、穴の中に樹木の種子をまき、乏しい雨

水を蓄えて、発芽、生長させる。山地を緑化させ、水土流失を防ぐため、黄土高原で広く実施されている。

⑫ 全国農業発展要綱の淮河以南の地域の到達目標「ヘクタール当り六トン」をこえたと言ふ意味である。

⑬ 河野通博「中国の水利建設」、『歴史地理学紀要』七、一九五五年。

⑭ 鄧子恢「閩干根治黄河水害和開発黄河水利的綜合規画的報告」、黄河水利委員会編、『黄河』（一九五七年刊）所収。（日本語訳は『人民中国』一九五五年第十号にある、一九五五年七月第一期全国人民代表大会第二次会談での報告である。）

⑮ 『改造大自然、河水听使喚』、中共河南省禹県县委、一九五九年刊。

⑯ 『中国の治水・水利に関する研究』、亜細亞農業技術交流協会、一九六一年。

四、農業技術の科学化^①

大寨の生産力水準が著るしく上昇した一因はたしかに自力更生の精神にもとづく自然改造にあったのだが、それと共に自主的な科学実験から生れた農業技術水準の上昇も見逃してはならない。一九五二年に陳永貴はもとは一枚だった畑に植えられたとうもろこしが播種の浅深により、成育状況にも、収量にも大きな差のできたことに気づいた。しかしまだ当時は社員ばかりか、幹部でさえ旧慣になずんだ考え方をしている、作物の豊凶の原因を天候だけに求めた

り、肥料さえ多投すればたくさんとれると考えてあとの管理には関心がなかった。農業生産性を高めるにはまづ科学実験を行ない、その経験を総括して新技術体系を創造せねばならないが、それには保守思想、旧慣になずむ態度と言う重荷をすてさせねばならないと陳永貴は考えた。これも革命闘争の一つだが、この闘いには武器を使うことも、大衆集会の開催も役に立たず、ただ事実に基づき説得しか道はなかった。

当時農業技術改良普及員が「白髮病に罹った粟稈を家畜の飼料にし、その糞を粟に施すとまた白髮病が発生する」と言っていたが、皆は半信半疑だった。陳永貴はこれをとらえて、試験田を設け、試験した結果、正しいことが立証された^②。これ以後大寨では幹部も社員も試験田を設けて、研究に取組みはじめた。

一九五三年陳永貴は幹部と共に趙背峪の粘土質土壌のとうもろこし試験田に灰渣糞（石炭がらを人糞と混ぜ合わせたもの）を施して顕著な増産効果を与えた。翌年砂質土壌の麻黄溝で同じ試験をした所、却って減産してしまった。ここから大寨人は施肥方法をそれぞれの畑の土壌の性質に応じて

変えねばならぬことを学びとった。また一九五八年磷酸石灰が著るしい増産効果のあることを聞いて、試用してみたが、燐肥をそのまま撒いたのでは畑が灰色になるだけで、全く効果が上らなかつた。そこで種々の肥料との混用試験を五年間続けた結果、最も効率的な方法を突きとめた。準乾燥地域の畑では直接的使用は効果がなかつたのである。

品種改良も「因地制宜」の方針で試験した上で、さらに合理的密植がどの程度可能かも研究した結果、とうもろこしの場合、以前は一畝当り七〇〇——八〇〇株程度だったものが、谷底の畑では晩生種一八〇〇株以上、尾根筋では晩生種二〇〇〇株以上、山腹では早生種二三〇〇——二五〇〇株の栽培が可能だと言う一般的原则を見出し、さらに畑の条件に応じて品種と植付株数をきめていった。また土、肥、水、種、密、保、管、工と略称される農業の八字憲法についても、農民の手で試験をした上で、従来の経験と新技術を結びつけて活用する方針を貫いていった。

これらの基礎の上に大寨人が考え出した新しい技術としては、「稭稗還田」、「三深」、「四不專種、三不空」、「移苗補種」の四つが代表的なものとしてあげられる。

「稭稗還田」は糞稗類を耕地に鋤き込むことで、大寨では粟稗を家畜飼料とし、炊事用には近くの石炭を使用するので、とうもろこし稗を全量投入したのである。大寨の土壤は有機質に乏しかったため、海綿田化するには大量の有機質肥料の投下が必要であったが、年々の増産の結果、稗類の施用も一畝当り、二七担（一九五三年）から八四担（一九六四年）に増加した。

「三深」とは深耕、深種（深蒔き）、深創（草けずりを深く行うこと）で、深耕のため尾根筋や山腹では客土により耕土を厚くした。三深を行なった結果、とうもろこしの一畝当り収量は実施前の四〇三斤（一九五六年）から一九五九年には七六四斤に、一九六四年には八八八斤に増加した。八年で倍増である。

「四不專種」とは豆、麻、瓜、野菜をすべて穀物の間作として作り、専用の畑を作らぬことである。大寨ではもとは谷間や肥沃な畑にとうもろこしを植え、耕地の大部分を占める山腹や尾根の畑には粟、豆、高粱を植えていた。だからとうもろこし畑は耕地の三割程度にすぎなかつた。自然改造と肥料増産の進展に伴いとうもろこしの作付面積は

急増し一九五七年には四〇〇畝をこえたが、豆の作付面積は八〇畝から五畝に減った。だがこれが新しい問題を生んだ。大寨人は豆を食べなれているので、豆の減産に不便を感じたからである。そこでとうもろこし畑に大豆、粟畑に小豆を間作したところ好成績だったので、さらに高粱畑にからし菜、畦に瓜や麻を植えることになり、豆類の生産額は間作以前よりも多くなった。「三不空」とは地辺(畑のへり)、地塙(畑の畦畔)、地角(畑のすみ)を遊ばせておかないことで、零細耕地が分散している大寨では、その合計面積は三〇畝に上り、ここに作物を植えて二万斤以上の増収をみた。

「移苗補種」は欠苗になった所に補植することである。大寨のような山村では野鳥、野獣に荒されたり、また水分不足で苗が活着しないこともあるので、そこに補植して、減収を防ぐのであるが、後には粟を苗床で育てておいて、麦を刈った跡に移植する実験も行なっている。

日本のように省力化を農業近代化の基準とする観点からすれば、以上の農業技術は極度に労働集約的な、近代化に逆行するものと言うことになる。三不空のため専門に植え

て歩く人が一人いることなど特にそう感じられるかも知れない。しかし現在の段階で一第二白から脱却するためにはこの方法しかなかっただろうと云うことが先ず言えるし、劉少奇が主張したと云われる考え方のように機械化を待っていたのでは農業生産力の上昇ははるかにおくれているであろう。また彼らは土地生産性の上昇ばかりを考えて、労働生産性を高めることを無視しているわけでは決してない。基盤整備をはじめ、簡易ケーブルの架設、水利施設の改良などにより労働生産性の高まりも著しい。一方でこのように農業装備の充実をはかりながらしかも彼等は社会主義建設を支援するため、寸土をも余す所なく利用しようとするの意志にもとづいて、積極性を発揮しているのだと云うことを見逃してはならないだろう。

① 本章の主要文献

- A 『農業戦線上二面紅旗「大寨」』三六一—五二頁。
- B 『大寨紅旗飄』二八一—四四頁。
- C 『大寨之路』。

特に註記しない具体的事実はBによった。

② 資料Cによる。

③ 「工業が国有化されてはじめて、農民に大量の機械を供給できるようになるのであり、そのちに土地の国有化や農業の集団化がはじめ

て可能になるのである。」(劉小奇が一九五一年五月七日宣伝工作會議で行った演説とされる。『中國農村兩条道路的闘争』より引用。

④ 一九六五年三カ所に設置。『人民中國』一九六七年一月号「新中國の愚公たち」による。

⑤ 三・五キロはなれたダムから引水し、四〇〇畝の畑地灌漑が可能となった。(『大漕在毛沢東思想的光輝照耀下前進』)。

五、群衆の積極性の組織化^①

大寨では自然改造でも、農業技術の發展でも、大衆が非常に積極的な所に大きな特色があるが、集団經營の中で大衆が積極的に行動する現実的な裏づけとしては、適正な労働管理と公正な賃金の支給が保障され、幹部が大衆からしっかりと支持されていることが必要である。だが大寨でも労働管理方法や労働点数決定方法ははじめから理想的なものが存在していたのではない。むしろ試行錯誤をくりかえしつつ、住民自身が、社会主義学習を通じて、つくり出していったものであった。

一九五三年、初級農業生産合作社の結成当時、大寨には二つの生産隊があり、各隊は三作業組からなり、組長と組員は固定していた。彼等は生産隊長の指示にもとづき、作

業組長が引率して作業した。この方式は一応規律正しくはあったが、農作業のように複雑で、天候の変化や作物の状態に応じて、臨機応変の処置をたえず必要とする仕事を円滑に実施するためには柔軟性に乏しく、小人数が過重な作業に当たったり、反対に作業量に比べて人数が多すぎたりする事がよくあった。人民公社成立後、大寨生産大隊では各生産隊で固定作業組に細かく区切った作業を請負わせることにした。これも生産を組織的に行なう点ではある程度有効だったが、天候の都合で急に作業内容を変更する必要がある時などは融通がきかなかつた。そこで一九六〇年からは家畜飼育係や副業係は専従の責任者を置き、人を変えなかつたが、耕地での作業はその内容に応じて労力を按配することとし、固定作業をやめて、臨時作業組に改組した。これにより重点的に多くの労働力を集中させることができ、臨機応変の措置も可能になったし、また各人の長所を生かした配置を行なえるようになった。作業組の幹部も固定しないで、その時々々の作業内容に応じて、熟練度が高く、作業態度のよい人を組長(短幹部)に選び、常任の幹部(長幹部)が援助しながら、短幹部を訓練して指導者として鍛え

上げてゆく方法を採用した。

更に一九六四年からは生産大隊を単位として労働力配分を実施し、作業組長、作業組の人数、作業組の労働力を固定せず（三不固定）、農作業の必要度に応じて組織する方式に進んだ。この方が一九六三年の大災害の後の非常事態の処理にあたって、機動性を發揮し、また大衆のもつ潜在能力を十分に引出し、生産任務を達成するのに役立つというねらいからであったが、その成功を基礎に、現在もこの方式が継続され、大寨では生産隊ではなく、大隊が経営単位になっている。もちろんこれが最終で最高の方式だと考えているわけではないと思うのであって、今後の四化^②特に電化と機械化の進展に伴って、より広域的な労働力配分も考えられる可能性があるが、個別経営（単干風）や戸別請負（包産到戸）など三自一包への逆行は明白に否定されており、また事実、集団化の中で生産力上昇がちとられて来たのだから今後も集団農業を強化する路線を堅持しつつ、新たな前進方向が模索されることは疑ない。

このような集団作業の中で生産意欲を高めるためには労働報酬の公平な算定が必要である。ことに社会主義の段階

において分配は人民の必要に応じてではなく、労働の質と量に応じて行なわれる。それだけに皆が納得できる分配制度の確立が必要となる。と言って物質的刺激を第一とする経済主義的分配原則になり下ったのでは、社会主義建設の根底が掘り崩されることになる。彼等は考えている。ここに政治を優先させた、しかも大衆を納得させ、その積極性を十分に發揮させられるような管理制度の確立が重大な問題となって来る。

この面でも大寨の方法は何段階かの変化を経て来ている。第一期には「評工記分」方式をとった。これは毎日作業終了後、その日の作業状況にもとづいて、各人の労働点数（工分）を畑で大衆的に評価し、その結果を台帳に記入する方式であるが、作業を早目に切り上げて、日の高いうちから始めても、なかなか評価が一致せず、次第に暗くなつて、婦人や老人は先に帰ってしまうし、結局隊長まかせになり、結局基準賃金しか記入しないので毎日の仕事についても十分に大衆の積極性を引き出せない欠陥があった。そこで一九五六年高級合作社が成立して以後は「定額管理、按件記工」方式に切りかえた。これは山西省武郷県密上溝

合作社の定額管理の経験^③に学んだもので、あらかじめ各種農作業ごとに点数をきめておき、それにあてはめようとするもので、一々評定のため議論する必要はなくなった。だが農作業は複雑だから、作業項目は一三〇にも達した上に、耕地だけをとりあげてみても山頂、山腹、谷底と多様で、耕地の大小、遠近、作付順序、農具の良否、家畜の優劣、土質の硬軟、耕深などによってそれぞれ投下労働量が異なるし、また気象の変化によってたちまち点数を変えねばならず、幹部は計算に追われて、生産労働に参加する時間を奪われるから、労働参加を通じて大衆と接触し、意志を疏通させる機会を失うことになったし、大衆の中には定額を完成しないと罰金を取られることを恐れて積極的に仕事をするが質をおろそかにするものや、質より量だとばかり点数かせぎをするもの、さらには点数にならない仕事はやらないものが現われ、質を無視して点数かせぎをする者い者に比べて真面目な人間の点数が低いと云う欠陥を生じた。

一九六〇年にこのような矛盾を解決するため、大衆討議を行なって、「分項計酬」方式に改めた。これは作業の質と量が簡単に計算でき、検査もできる肥料や穀物の運搬な

どについては定額制でゆくが、複雑な作業については皆で労働の質も量も最高な人を標兵（標準となる人物）として選び出し、その人の一日分の作業を労働点数で表現した後、各人に標兵を基準として自分の作業内容を自己評価させ、それを大衆討議にかけて評定すると云うやり方である。最初は他人が利己的と思わないだろうかと恐れて少な目に自己評価するものや、逆に多い目に言う者もあったが、党員や貧下中農に対して教育してゆくうちに、次第に合理的になっていった。

折しも起ったのが一九六三年夏の大災害であった。社員たちは災害復旧に立ち上り、定額がどれだけにきまるかを待たずに、男女老幼を問わず、昼も夜も働いた。一人で二、三人分の仕事をするもの、一日に四、五種類の農作業をするものも現われ、全員ができることは何でもやってのけた。仕事が一段落した時幹部は労働点数をどう記入すべきにはたと困り、大衆討議にかけた。その過程で労働報酬の適正化は生産を高めるためであり、生産性向上には量だけでなく、質の保証が必要であることと、質の向上には社員の社会主義建設に対する自覚が先決問題であることが明確に

され、社会主義教育（中国の場合それは毛沢東思想の活学活用
の形をとる）の徹底こそ問題をとく鍵であると言うことが
認識された。そして後になってではあるが従来の煩鎖な管
理方式が本質的にはやはりブルジョアの個人的利益を重
視し、物質的刺激にたよる管理方式であり、幹部と労働大
衆を引きはなし、社会主義的集団化の道から逸脱させる性
質のものであることが反省されたようである。^① こうしてい
ろいろな方法を比較検討した結果、先に試験的に行なっ
ていた標兵を立てて、それを基準に自分で労働点数を評価し、
大衆的にその適否を考える「標兵工分、自報公議」方式が
比較的簡単で、実行容易であると言うことになり、以后全
面的に採用されることになった。標兵は最高の労働点数を
もらえるが、標兵には労働の質と量のほか集団労働の中
の態度も勘案した上で大衆的にえらばれるのであるから、
相互援助、相互学習と言った点でも模範になることが必要
であり、また皆が点数を争うのでなく、標兵になることを
競いあうため、生産意欲が非常に高まっていった。

最初は毎日標定をしていたが、次第に十日に一回、半月
に一回でよくなり、現在は月に一回程度の評定を行なって

いる。陳永貴は標兵工分、自報公議の長所として次の五つ
をあげている。第一は繁雑な定額制度をやめたので、社員
も幹部も時間的余裕ができ、学習や物を考える時間ができ
たこと。皆「標兵の方法は簡便で、働いただけ労賃がもら
え、報酬も公平だ」と満足している。定額時代にはノルマ
を完成しないと賃金を差引かれたが、それがなくなったの
である。第二に報酬の格差が縮少され、社会主義的な労働
の質と量に応じた分配がより良く実現されるようになった
こと。第三に次第に利己主義が改められ、共産主義的思想
が確立されはじめたこと。評兵をきめる時思想や労働態度
が評価され、利己主義が批判されるので、本人はもとより、
大衆の思想水準を高められる。第四に従来は幹部が大衆を
指導管理し、大衆は指導、管理を受けるだけだったが、新
方式では民衆が民主的に討論して自主的検査をやるから、
民主性を十分に発揮でき、少数の幹部だけでなくれた管理
が行なえ、民衆と密着できるし、幹部に対する民衆の監督
もゆきとどくようになること。第五に、今まで幹部は事後
検査をしなければならなかったが、その必要がなくなった
ことである。

① 同本章の主要参考文献。

A 『大寨紅旗飄』四四―五二頁。

B 「突出政治的生動一課、陳永貴談大寨大隊在勞動管理中堅持社會主義方向的經驗」、『人民日報』一九六六年三月二日。

労働管理方法については主としてAに、労働点数決定方法については主としてBによった。

② 水利化、化学化、機械化、電化。

③ 「一箇合作社实行定額管理的經驗」、『中国農村の社会主义高潮』中共中央弁公庁編、一九五六年刊、所収。

④ 「狼抓階級闘争、在社会主义道路上闊步前進!」、『人民日報』一九六八年八月二六日。

六、幹部の労働参加^①

人民日報は一九六三年六月二日の社論で、「幹部が労働に参加することは偉大な革命的意義をもち、党の根本にかかわる政策であって、我々が階級闘争、生産闘争、科学実験の三大革命運動を行ってゆく上で勝利をかちとるための重要な保証であり」、「集団的生産労働に参加して労働大衆と一つになることは、民主的に人民公社を運営し、勤勉節約して公社を運営するための根本原則であって、集団経済を鞏固ならしめる重要措置である」と述べ、陳永貴を典型として紹介したのだが、それは大寨の全幹部にあてはまる

ことである。生産大隊長の賈承讓は毎年三二〇労働日を下つたことなく、第一生産隊長の梁変良も毎年三五〇労働日を越えている。全国から連日のように殺到する參觀者の接待で多忙な陳永貴は省・県に行く日も多いが、二六八日は労働している。

また幹部は常に先頭に立っている。一九六三年災害では幹部は七昼夜一睡もせず、身の危険を顧みず、また病気を押し、最も困難な仕事の先頭に立った。彼等はまた生産技術の上でも模範的な人物であり、しかも謙虚である。賈承讓は解放前は日雇生活一五年、教育も満足に受けられなかったが、合作社成立当時、会計係の重任を果し、農業面でも自学自習して人に「作物通」と呼ばれるようになった人である。大寨の家屋や堰堤に使う石材をほとんど一人で切り出した賈進財^②も一歳から地主の年雇として二五年間も虐げられた経歴をもつが、土地改革当時から黨員として大衆を指導し、党支部書記となった。しかし彼は土地改革運動の中で、陳永貴が階級観念の明確な、信用のおける人物で、何でもやれる能力の持主であることを見出していたので、合作社が成立すると、永貴を書記に推し、自分は進ん

で副書記となり、さらにそれも若者にゆずって、家畜飼育係を志願し、最も目立たない職場で、繁雑な仕事を黙々とやっている。「破私立公」の典型とよんでよい人物だろう。陳永貴は二九〇〇枚の畑の一枚一枚の具体的情況が頭に入っている人として知られるが、同時に科学実験の推進者であり、すでに三〇をこえる技術改良と二〇をこえる新技術の普及を行なっている。また大衆の智慧を生かすことにも熱心である。

大寨の幹部は生産点を離れない上に、貧下中農と固く団結しているから村内の動きは手にとるようにわかる。地主・富農のひそかな煽動もすぐ報告がある。富農の妻が一九六三年の災害に遭って以後、「何でこんなに働かなくてはならないの。働いたって希望なんてありゃしないじゃないの」と不満をぶちまけ、別の富農の息子は自分で肥料運搬をなまけただけでなく、四人の社員を煽動してさげらせた。その晩党支部は貧下中農を召集して「擦亮眼睛会」を開いて、皆に富農の行動を研究させた。社員たちは「階級の敵がこの困難を利用して煽動し、火をつけようとしたのだ」と真相を見抜いた。

大寨は見学者も多いが、幹部は昼休みや夕方參觀者を接待し、労働時間には食い込まさない。準乾燥地帯であるだけに、雨を無駄に流してはならないが、雨天には幹部はふだんより早起きして、家族をひきつれて谷間の堰堤に出かける。よその村の人が牛国棟と云う社員に「雨の日まで働くのか」とたずねた。彼は「うちの幹部は皆よろこんで働いている。陳永貴など泥人形みたいだ。幹部が働いているのに怠けていては申しわけない」と答えたと云う。しかもここ十数年生産大隊事務室には新しい家具や調度は買っていない。また幹部だからと云って、労働点数を一寸でも増すことも勿論やっていない。会議は主に晩にやり、能率的に回数を減じ、社員に対する作業割当、教育宣伝、表彰や批判は晴天には必ず毎日早朝に飯場と呼ばれる村の広場に茶碗を片手に集った全社員と共にやっている^④。このような幹部たちの私心を捨て、常に先頭に立って難問題と取組み、全力をあげて人民に服務する作風が、この村の革命的志気を高める根底にあったわけである。

① 本章の主要参考文献。

△ 『大寨紅旗』五二一—二〇四頁。

② 「幹部参加労働的偉大革命意義」『人民日報』社論、一九六三年六月二日。(一九六三年版『人民手冊』所収)

③ 「大寨の老石工賈進才さん」(『人民中国』一九六五年一月号) になり詳しい紹介がある。

④ 飯場会と呼ぶ。この飯場になっている広場に柳の大木があるが、解放前は「苦人樹」と呼ばれていた。地主が貧乏人を拷問する場所があったからで、地主のため柳に半日以上吊り下げられて、殺された女の人もあった。解放後土地改革のための大衆集会、合作社の結成大会もこの柳の下で開かれた。階級教育にはもってこいの場所である。

七、二つの路線のたたかい

七人の幹部を先頭とする大寨の貧下中農は自力更生の精神で自然と戦いながら、新しい農村を建設すると共に社会主義的思想水準を高めていったが、それは同時にプロレタリアートとしての連帯精神を高めることになった。一九六三年の大災害の際にも、国家から救援物資や復興資金について解放前には全く考えられなかった手厚い配慮を受けたこと①に感激はしたけれども、それらのものはすべて自分たちよりもっと激甚な被害を被った村々(大寨人民公社にも二個大隊あった)に贈ってほしいと言って辞退し、敢て自力復興の道をえらび、わずか二年で、従来より居住条件のは

るかにすぐれた家屋を新築し、耕地もすっかり復興させた。大寨では被災後大衆討論を重ね、自力更生の精神で災害にうち勝つことは次の一〇点で有利であると総括して、自力復興に乗り出したのだと陳永貴は述べている。その要旨は、

1. 社会主義建設に有利。中国人民が依拠すべきものは一にも二にも社会主義であって、国家に救災費を要求すると、それだけ社会主義建設の時期を遅らせ、資金を奪うことになる。自分でできることで国に金をねだってはいけない。
2. 集団に対して有利。多年の経験の示すように大寨は集団の力で増産し、供出量も大隊の貯備食糧も農家保有米も増加した。自力更生で困難を克服すれば、更に集団経済の威力を明示できる。
3. 個人に有利。人に頼る依頼心を捨て、勤勉節約して労働にはげむようになる。
4. 階級闘争に有利。自力更生の精神を貫いてこそ、人民の志気を高め、地主、富農の威風を失なわせることができる。
5. 幹部に対して有利。自力更生なら、上級機関まかせに

できないから、幹部が自主的に対策を考え、積極的に取組むようになる。

6. 「比学趕帮」^⑤に有利。大寨が自力更生してはじめて、他村も自分たちもやればできるのだと考える。

7. 先進単位の旗を引続き掲げるのに有利。国に頼っては、他単位は自分の村がおくれているのは国の資金援助がないからだと言うだろう。

8. 生産発展に有利。自力更生で困難を克服すれば、社員は振り立ち、集団経済を大切にしようとする。

9. 人民公社に最も有利。大寨公社の二三生産大隊のうち二大隊は三年連続の災害で困窮も甚だしい。これらの大隊を救援してこそ、人々の公社支持を更に強めることができる。

10. 団結に有利。大寨では八〇戸中七八戸の住居が破壊されたが、国の復興資金には限度があり、全戸に行渡らない。もらったものともらわれないものがあると団結を阻害するから、むしろ、自力更生の精神で共同で困難に打勝った方がよい。

以上の十条の中には若干理解しがたい部分もあるが、大寨人が、大寨だけの発展を考えているのではなく、むしろ

常に全体を見わたし乍ら、総体としての社会主義発展を考えていることは十分に読みとれる。そこから大寨に追いつこうとする村に対する無私の支援と全国のすぐれた事例に対する謙虚な学習とが生れて来ている。後者は一九六五年に出された「全国学大寨、大寨学全国」のスローガン^⑥にみられるもので、河南省林県、山東省黄県下丁家大隊^⑦などに
出向いて、その先進的経験を学びとって来ている。大寨が
不得手だった植林や果樹作や畜産或は水路建設などはこ
れらの学習による所が大きいようである。彼等自身は「わ
れわれの林業は昔陽県白羊峪に及ばず、畜産は忻県の白家
溝に及ばず、多角経営は平順県の西溝などに及ばず、毛主
席著作学習は絳県の南柳に及ばない」と反省し、現状に自
己満足しないで、先進地に追いつこうとしている。

後進単位に対する支援の例としては、虎頭山をへだてて隣接する井溝大隊の場合があげられよう。^⑧一九五九年井溝大隊は大寨大隊に追いつく決意を固めたが、大寨は自然改造のすべてについて教えただけでなく、あらゆる面で物質的にも精神的にも支援を怠らず、時には決して余っていない化学肥料を譲って井溝が適期に施肥できるようにした

こともあった。こうして井溝は一九五九年の一畝当り収量二七九斤から、六〇年には四〇〇斤、六二年には五〇五斤に増大し、大寨と共に「山西省特等農業先進単位」として表彰をうけるに至り、六三年災害も大寨にならって、自力で立派に復旧をなしたとげた。比学趕帮運動の模範例の一つと言えるであろう。

だが毛沢東思想に立脚して、忠実に毛沢東路線を歩んできたはずの大寨に対してたびたびはげしい攻撃が行なわれ、短期間ながら大寨党支部の指導管理権が奪われた時期さえあったことが最近明らかになって来た。以下主として人民日報の記事にもとづいて、この問題をさぐってみよう。

一九五一、二年に初級合作社の結成を要請した時も上からの妨害があったことは先に述べた。一九五七年は百花齊放の風潮に乗じて、右派分子がブルジョア的観点からする党攻撃をまきおこし、反右派闘争の行なわれた年であるが、この時大寨およびその周辺の地富反壞分子も右派分子にならって大寨に攻撃を加え、はげしい思想闘争が行なわれた^①。大寨はちやうど狼窩掌に挑んで、二度目の失敗を喫した年で、最大の苦境に立っていた時のことである。恐

らくこの時の地主・富農による流言蜚語やあくどい攻撃を指すのであろうが、貧下中農は堅く団結してこの難局を乗り切ることができた。こうして一九五九年には昔陽県の労働模範大会で一本の大きな紅旗と一頭の牛を賞品として与えられ^②、また五九年一〇月昔陽県党委員会は大寨模範事跡^③ 展覽会を開いて幹部を教育し、その名声は次第に山西省内に知れわたっていった。ところが一九六一年昔陽県に赴任した新らしい第一書記は、着任七日目にさっそく十数人の部下を連れて大寨に現われ、耕地面積、收穫量、供出量の検査を行なった^④。当時山西省の当権派はさまざま手段を講じて、大寨の名声を傷つけようとしていたと陳永貴は主張しているが、彼によるとこれもその一つの現われであったが、收穫量、供出量にはいささかも間違いはなかった。当時は開墾をした結果増加した面積については上級機関に報告しなくてもよい規定になっていたし、大寨では開墾面積三〇畝に対して、畑に植林した面積が三〇畝あり、耕地面積に変化はなかったにも拘らず、この第一書記は大寨の幹部の説明を頭から信用せず、大寨は耕地面積を不正に報告していたと悪宣伝を行うと共に一九六〇年の一畝当り

収量を実際より四〇斤低くし、供出量も二万斤少なく申告し直せと事実を反した報告を強要したと言う。^⑮一九六〇年は山西省は史上まれに見る大旱魃の年であったが、大寨は自然改造のおかげで、今までにない豊作を記録し、各農家の保有米もゆたかになった。供出量も国からの割当は当時八万斤にすぎなかったが、一九五九年には一九万斤を、そして一九六〇年には一躍二四万斤を供出し、人民公社の優れていることを実証してみせた。^⑯また当時一部の投機分子は折からの旱魃に乗じて家畜飼料の粟稗の闇値を一斤二角又は三角に引上げて、大もうけをたくらんだが、大寨は逆に一斤五分の低価格で兄弟生産大隊に売って、闇行為を防止し、社会主義と資本主義の違いを全県大衆にはっきりと示した。^⑰このような社会主義的集団経済の優越性と人民公社化の成果を鮮明に示した大寨の行動は、当時三面紅旗に反対し、「三自一包」、「単干風」などの「修正主義」路線を推進していたと言われる当権派にとっては重大な脅威であり、それが県第一書記による大寨攻撃となったものだと陳永貴はのべている。^⑱だが当権派はこれくらいであきらめたのではなかった。

一九六四年冬、彼等はまたも四清運動の機会を利用して、大寨に対し計画的、組織的な攻撃をかけたと言われる。^⑲もとも四清運動とは河北省保定市付近の農村人民公社大衆の「帳簿をあきらかにし、倉庫をあきらかにし、財産物資をあきらかにし、労働点数をあきらかにする」要求から生れたもので、毛沢東主席がこれをとりあげて四清運動と名づけ、農村の社会主義教育運動に発展させたものである。一九六三年五月の「当面している農村工作のなかの若干の問題についての中共中央の決定」（前二〇条）の第八条では、四清運動とは大衆を思い切って立ち上らせて幹部を批判させ、幹部にその過ちを改めさせ、九五%以上の大衆、九五%以上の幹部を團結させて、資本主義勢力の攻撃に打撃を与え、それを粉砕する社会主義革命闘争と規定されており、一九六五年一月の「農村の社会主義的教育運動のなかで当面提起されている若干の問題」（二三カ条）では四清運動は農村と都市において政治・経済・思想・組織を清める運動へと発展・拡大させられることになった。^⑳つまり四清運動とは、資本主義から共産主義へ移行する歴史的時期の全過程を通じて、階級と階級闘争が存在すると言う観点に立って、資

本主義勢力と封建勢力の気狂いじみた攻撃を打ち破り、社会主義陣地とプロレタリア独裁とを強化し、修正主義の発生する社会的基礎を根こそぎにしようとするもので、その運動の重点は「党内で資本主義の道を歩む」ひとにぎりの当権派を一掃し、社会主義の陣地を強化発展させることにありとされている^②。そして四清運動を指導援助するため工作隊が派遣された。ところが一部の工作隊は秘密のうちに村に入り、貧下中農大衆に依拠することなく特定の、ごく少数の人物を腹心にして運動を進め、大多数の幹部を四不清であるとして、これを攻撃を与え、貧下中農大衆を立上らせるどころか、これを抑圧すると云った行動に出たと言う。当時一部の国家指導者が四清運動の模範として全国に宣伝した、河北省撫寧県盧王庄人民公社桃園生産大隊に一九六三年一月から一九六四年四月まで派遣された、劉小奇夫人王光美を指揮者とする四清工作隊の行動が実はこのようなものであったと言う調査報告が一九六七年九月の人民日報に掲載され、同日付の解放軍報の社説ではこれを桃園を毛主席のプロレタリアト階級革命路線に反対し、形は「左」で実は右のブルジョア反動路線を推進する黒い試験

場にしたもので、資本主義復活を目ざした、計画的、組織的大陰謀であったと鋭く攻撃している^③。この調査によると、王光美は変名で秘密にこの村に蹲点し、かねてから劉小奇に取入っていた悪質分子（賭博、横流しの常習犯）や、詐欺師を腹心に活動を進めて、これらを大衆の反対を押しきって村の幹部に登用すると共に、多数のもとからの良心的な幹部の些細な過誤をきびしく摘発し、無実の罪をきせ、党籍を剥奪したほか、これに批判的な社員にも迫害を加えたと言われる。そして毛主席の推す大案に対抗して、桃園を模範的農村にするため、大量の国費を投じて灌漑設備や道路を建設し、また周辺の公社を犠牲にして、桃園だけに多量の化学肥料を供給させ、公社所有の大型農具も優先使用させると言った経済主義的振興策を強行したが、結果的にはすべてを国にたよる風潮が生れ、生産は却って不安定になり、収量も減少して、かつては超過供出していた桃園は保有米も不足するようになり、多額の借入資金の返済にも窮して、更に国からの援助を受けねばならぬ悲惨な状態に陥ったと言う^④。最近の報道によると、文化大革命の過程で復権した良心的幹部の指導の下に貧下中農が団結して努力

した結果、一九六七年には食糧生産量も増加し、超過供出ができるほど生産も回復したとされる。²⁹⁾

一九六四年冬二カ月にわたって、山西省上級機関から大寨に派遣された工作隊も陳永貴によると、桃園の経験に学んで偽の四清を行なう、当権派に操られた工作隊であったと言う。³⁰⁾ 彼らは「先進地区であればあるほど、しっかり疑ってかかるべきだ」と言って、強大な工作隊を派遣して来たが、彼等の大寨で行なった活動について、陳永貴はほぼ次のように述べている。³¹⁾

彼等は大寨に駐在している間、大衆と幹部を組織して毛著作学習をさせたことは一度もなかったが、農村四清運動の「先進経験」(桃園経験)は二〇回も学習させた。彼等は貧下中農や下層幹部には接近せず、ひそかに幹部に対して意見の最も多い人物を求めた。こんな人物は大寨では一にぎりの地富反壊分子しかないわけで、この連中は積極的に攻撃材料を提供して、工作隊の手足となり、どんな風を吹かすに至ったが、貧下中農と下層幹部は工作隊が闘争し、打撃を与える主要目標にされた。味方だと思っていた工作隊の意外な行動に直面した貧下中農は、やがて次々と出て

くる事実にもとづいて、彼らが大寨を援助し発展させるためではなくて、大寨に敵意をもち、破壊活動を行なうために来たものであることを見抜いた。

工作組は大寨党支部と貧下中農の強固な団結を、まれに見る不正常な現象と見なし、大集会や小集会を開いて、幹部の欠点や党支部の内幕を報告するよう貧下中農に迫ったが、真相を見抜いた貧下中農は断平抵抗し、その団結は却って強められた。

そこで工作組は幹部から一切の指導権を剥奪して直接指導に乗り出すと共に、至る所で大寨は虚構の上のうち立てられた紅旗で、その旗竿には虫がわいていると悪宣伝し、早く虫を駆逐するように大衆に迫った。しかし貧下中農は却って党支部を擁護し、工作組の指示に従わなかったので、工作組は彼等を反革命行為を行なっている変質分子であるときめつけ、地主・富農分子や一部の中農に別の生産隊を作らせ、彼らに対抗させた。そして大寨に難癖をつけようと次々と検査を始めた。

彼らは大寨は山畑ばかりからできているのに、一畝当たり収量が多いのは、耕地面積を少なく報告しているからにち

がないと、省、専区、県などの幹部七〇名余を動員し、五〇日以上もかけて、二回も測量してみたが、かくし田があるはずもなく、大寨の報告が正しいことが証明されただけであった。食糧作物の収穫量や供出量にも疑惑の目を光らせたが、少しも誤りのないことがわかった。

処置に窮した工作組は、大寨の食糧の計算は水分が控除してないから、不正確であると言いだした。これは水分を差引いて計算すれば、それだけ農家の保有食糧に充当すべき分量が増大し、供出量が減るから、農民は喜んで工作隊に味方し、幹部を批判するだろうし、また大寨の誇る超過供出量を削減させて恥をかかせることもできると言う政治的判断に立ってなされたものであったが、大寨の人々は「よく干してある穀物から水分を控除する必要があるか。いまソ連のフルシチョフは中国の大躍進は失敗し、人民公社は絶望的で、農民は五人で一枚のズボンをはき、うすい粥を啜っているとデマをとばしているが、そんな時わざわざ水分を控除して生産額を計算し、供出量をへらすことはフルシチョフに迎合して、社会主義建設にそむくことになり」と反論し、物質的刺戟によるだきこみ工作は失敗に終

った。

工作隊はさらに「標兵工分、自報公議」についても、これでは勤惰の区別ができず、労働の質と量に応じた分配はできない。これは陳永貴が勝手にきめたことで、社員の望む所ではないと非難した。陳永貴たちは「一人平均の労働日数が一九六二年の二五〇労働日から一九六四年には二八〇労働日に増加していることから社員がこの制度を支持していることがわかる。この管理制度が好成績を収めているのは、社員が毛沢東思想を深く学び、労働点数と言う物質的刺戟を優先させていないから可能なのであって、一幹部が強制できるようなものではない」と反論し、工作隊は一言もなかった。

いよいよ追いつめられた工作隊は大寨は食糧生産量が多いわりに社員の食生活がよくないと批判した。これに対して陳永達は「第一に我々の食物はあまりよくない。だが糠と豆しか食べられなかった過去に比べると何倍よくなったかわからない。第二に大寨の貧下中農が艱苦奮闘して、自力更生の精神で生産を發展させているのは、何も自分のためではなく、社会主義建設を支援し、世界革命を支援する

ためだ。もし我々が一年分の食糧生産量を全部自家用に供するなら、三年は食いつなげるが、それは一体社会主義的な農民のなすべきことだろうか。第三に節約励行・勤儉建国・勤儉持家は毛主席の指令である。我々に毛主席に背けと言うのか」と鋭く反論した。

このような激しい闘いの最中に、陳永貴は第三期人民代表大会第一回会議に出席したが、この会議の政府活動報告で周恩来総理は「われわれのすべての指導機関と広汎な幹部は解放軍、大慶、大寨の最後まで革命をやりぬく精神と工作作風を学ぶ」べきことを力説し、毛沢東主席は陳永貴と会見して、激励した。党中央の支持に奮い立った大寨党支部と貧下中農は固く団結して工作隊に抵抗し、彼等はついになす所なく村を去った。その後党中央から派遣された工作隊は大寨を政治・経済・組織・思想のいずれもすぐれた農村と認め、大寨の名誉は恢復された。以上が陳永貴が述べている事件の概略であるが、彼によると当権派は一九六五年から六六年にかけても、大寨の幹部をおとしめるために、ひそかに材料を集めていたと言う。また文化大革命の始まったのちも昔陽県の当権派（以前から大寨の成果が

伝えられるのを阻止していた幹部たち）は良心的な県委員会の張懷英書記らに反党集団の濡衣を着せ、張書記を弁護した陳永貴も反党集団の一員とされた（十月事件）とされる。しかし陳永貴は全県のプロレタリアート革命派を率いて、当権派と闘争し、経済主義の黒風を粉砕し、革命的大連合を結成し、昔陽県当権派より奪権して、革命委員会を成立させ、当権派の大寨に対する策動は決定的に破産してしまつたと報道されている。

以上の大寨をめぐる生じた諸事件については、文化大革命の渦中に報道されたものがかなり多いだけに、一方的な報道で、誇張された点が多いのではないかと考えられるであろう。しかし、大寨と云う一つの基礎地域が二つの路線の闘争の中で、はげしい争奪の対象とされたことは否定できないし、またその闘いの中でどのような諸点が問題とされねばならなかったのかもほぼ明らかとなつたとしてよいであろう。

① 医药補助費八〇元、安置金一〇〇元、アンペラ五〇枚を支給すると云う連絡があったが、大寨では傷病者もないことだし、兄弟大隊に廻してほしいと辞退し、救災費一千元についても何とか自己資金で困難を克服できるからと云ってもらわなかつた。（『大寨之道』）

- ② 自己資金三万元と貯蔵食糧三万斤を準備していた。(『大寨之道』)
- ③ 瓦葺の新家屋二六〇間分と石造窑洞七〇が新築された。
- ④ 「大寨人の革命志気」。
- ⑤ 比べ、学び、おいつき、たすける運動、一九六三年春から大衆運動として展開、六五年より、これに「追いこす(超)」が加わった。
- ⑥ 一九六四年一月红旗渠と云う延長七〇キロの灌漑水路が完成した。これは山西省平顺県より、山を穿ち、河を越え、断崖を掘りこむ難工事を自力で完成したものである。
- ⑦ 三層様式灌漑水路網の自力建設で知られる。
- ⑧ 「大寨红旗飄」九九頁。
- ⑨ 同右六四一六七頁。
- ⑩ 「狼抓階級闘争、在社会主义道路上闊步前進!」、『人民日報』一九六八年八月二六日。
- ⑪ 「大寨红旗飄」六五頁。
- ⑫ 一九六六年版『新中国年鑑』。
- ⑬ 「大寨是在同中国赫魯曉夫的闘争中前進的」、『人民日報』一九六七年八月六日。
- ⑭ 「新中国の愚公たち」、『人民中国』一九六七年一二号。
- ⑮ 前出『人民日報』(六七年八月六日)記事。
- ⑯ 前出『人民日報』(六七年八月二六日)記事。
- ⑰ 同右。
- ⑱ 前出『人民日報』(六七年八月六日)記事。
- ⑲ 同右。
- ⑳ 「当面している農村工作のなかの若干の問題についての中共中央の決定」第八条。
- ㉑ 二三カ条の第三条に規定されている。
- ㉒ 同右、第二条。

- ㉓ 「飯四清真復辟——関于党内最大の走資本主義道路当権派導演的桃園大隊「四清」情况的調査」、『人民日報』一九六七年九月六日。
- ㉔ 「揭開一箇復辟資本主義的大陰謀」(解放軍報社論)、『人民日報』一九六七年九月六日。
- ㉕ 前出『人民日報』(六七年九月六日)記事。
- ㉖ 「桃園大隊發生了天翻地覆的变化」、『人民日報』一九六八年八月一日。
- ㉗ 前出『人民日報』(六七年八月六日)記事。
- ㉘ 前出『人民日報』(六八年八月二六日)記事。
- ㉙ 前出『人民日報』(六七年八月六日)記事。
- ㉚ 前出『人民日報』(六七年八月六日)記事。
- ㉛ 「陳永貴響應毛主席号召站在闘争前列、為全省全國労働模範樹立了光輝榜樣」、『人民日報』一九六七年三月五日。

八、おわりに

一九六六年、红旗第八号の巻頭社論「毛沢東思想領先、幹部層々帶頭」に次の一節がある。

「大寨生産大隊は荒れはてた山、やせた土地という自然条件におかれているにもかかわらず、国家に資金も物資も要求せず、つぎつぎと多収穫の農地をつくり上げ、連続的に大豊作をかちとり、わが国の社会主義農業建設のために偉大な手本をうちたて、輝やかしい道を切り開いた。かれ

らがよりどころとしたのはなにか。それは毛沢東思想である。広く名のきこえた大寨の人びとは、ほかでもなく毛沢東思想で武装した人々である。」

序文でも述べたように、大寨と言うと、不屈の闘志に燃えて、自然改造事業をやり抜き農民自身の手で科学実験を行って、生産技術を改良し、稔産高産田をつくり上げた村として有名である。それはそれで正しいには違いないが、そのような目ざましい発展がなされた基礎には、大寨の貧下中農が個人的利益を優先させることなく、社会主義的集団化の道を堅持し、相互批判、相互支持の原則に立ってしっかりと団結し、積極的に前人未踏の事業に取組んでいった事実があり、その思想的よりどころとなったのが毛沢東思想であった。

その意味で大寨は「活学活用毛沢東思想」の一典型でもあった。更に大寨はその建設を進めてゆく中で、自然と闘っただけではなく、人と闘ってきたのだと言っている。^① 彼等は村内の階級敵と闘い、当権派の反革命修正主義思想と闘い、更に自分自身の頭の中にも巣くっているブルジョア的もしくは封建的旧思想・旧文化・旧風俗・旧習慣と闘

い、社員の世界を改めたが、その武器としたのが毛沢東思想であり、^② また、幹部が先頭に立つこと、十分に大衆を立ち上らせ堅強な階級的隊列をつくること、毛主席の教えに従い、敵対的矛盾と人民内部の矛盾とを混同しないで正確に処理すること、二つの路線の闘争の中で社員の政治的自覚を高めることの四項を實行することによって、闘争に勝利を収めえたのだとしている。^③

しかしそれでもなお、大寨を典型としてこれほどまでに重視している理由、あるいはその目ざす所のものは何かと云う問題が残る。それは中国と云う七億の人民と九六〇万平方キロの国土をもつ広大な地域をいかに再編成してゆくのかと云う問題に関わるものだと考える。我々は地域を上からの支配秩序に応じた階層分けによって位置づけしやしい。そしてその支配体系の基底をなす最小単位の地域として基礎地域を考えやすい。しかしながら社会主義社会における基礎地域は支配体系の末端ではなくて、人民による支配の原点のはずである。この原点がどのような構造を示し、どのように機能するかは社会主義の本質に拘わる問題である。その意味において大寨は典型とされたのであり、「星

々之火」と考えられたのであろう。貧下中農に依拠しつつ、大衆の全力を發揮させて、自主的・積極的に天と闘い、地と闘い、人と闘う原点はすでに大寨だけでは無い。かつて「窮棒子^{すかんびん}」合作社として知られた河北省遵化県建明公社西舖大隊^④、「鶏の羽根が天まで舞い、上るものか」と嘲けられた河南省安陽県洪河屯公社南崔莊大隊^⑤、三層樓灌漑水路を建設した山東省黄県下丁家大隊をはじめ、青海省湟源県和平公社小高陵大隊、西藏自治区乃東県結巴鄉朗生互助組、雲南省麗江納西族自治県黄山公社に至るまで、次々と生れて来ている。社会主義教育運動はこれを燎原の火たらしめようとしたのではなかったろうか。これは当然文化大革命と深く関わる問題である。それと共に都市における基礎地域は中国では何に求められるべきであろうか。上海においては街道ではないかと考えられるが、まだ判然とはわからぬ。また農村における基礎地域を採算単位としての生産大

隊に確定してしまつてよいのか、或は人民公社をどう位置づければよいのかも問題である。これもなおおしばらくは、地域的特性に依じて(因地制宜)考えねばならないだろう。ただ基礎地域の主動的・自律的行動とコンミニョンの構造とは、軍事的必要性、つまり人民戦争の基礎単位としての役割からしても、多中心論への偏向をきびしく抑えながら今後とも重視され続けるであろう。

① 「狼狽階級闘争、在社会主义道路上闊歩前進!」、『人民日报』一九六八年八月二六日。

② 同右。

③ 同右。

④ 「書記動手、全党奔社」、《中国農村的社会主义高潮》五頁。

⑤ 「誰說鷄毛不能上天」、《中国農村的社会主义高潮》七七頁。

⑥ これらの諸単位の成果については「建設社会主义農業的光輝道路」(『人民日报』一九六五年一月一日)に紹介されているほか全国大寨式農業典型と言うシリーズで各単位ごとに単行本も発行されている。

(岡山大学教授)

policies of the Mamluk Sultans and the Egyptian merchant class, I explained the monopolistic policies of commerce and industry in the 15th century and its effects upon the merchant class.

Tachai

—the model of the socialistic village reconstruction—

by

Michihiro Kohno

Tachai productive brigade, a mountain village in the midst of Taihan mountain range in Shansi province, is called the model of socialistic village reconstruction in People's China, and, since 1964, the movement of "Learn from Tachin in industry, and learn from Tachai in agriculture" was spread all over the country. Above all, in the midst of the vigorous storm of proletarian cultural revolution, Tachi's reputation enhanced more and more, and now the movement to learn Tachai is spreading to the every corner of the country. Why Tachai is regarded as such a model.

Usually, Tachai has been held up as an exsample of how man, through self-reliance and determined hard work, can transform nature, and emerge from backwardness. The Tachai peasants have accomplished the seemingly impossible task of making their barrer, rocky hillsides into fertile terraces. At the same time Tachai is a model brigade who developed many high technical improvements in agriculture. But these are not so serious problem than the following. Who was the motive force for the upsurge of productive power?

In Tachai, the motive forces were the jointed poor peasants and the lower middle class peasants. The leaders of Tachai, who themselves were the sons of poor peasants, jointed with them, always worked with them, discussed with them, and learned from them to accomplish their hard enterprises. Such modern "Foolish Old Men who removed the mountains" have learned that the socialistic reconstruction means the struggle between the two lines, and, in fact, they fought with the reactionaries in the communist party as well as the former land lords, or the former rich farmers during the transformation movement for nature. Through the "Three Revolutionary Movement", that is the

